

# JSET

No.155  
2007-12-12

日本教育工学会ニューズレター

JAPAN SOCIETY FOR EDUCATIONAL TECHNOLOGY

事務局：〒141-0031 東京都品川区西五反田1-13-7 マルキビル  
電話 / FAX : 03-5740-9505 e-mail : office@jset.gr.jp  
日本教育工学会ホームページ http://www.jset.gr.jp/

ISSN 1340-9913

## 第23回日本教育工学会全国大会の御礼

会長 赤堀侃司（東京工業大学）

日本教育工学会の第23回大会が、早稲田大学人間科学部で開催され、盛会に終了しましたこと、厚く御礼申し上げます。

始めに、大会実行委員長の野嶋栄一郎先生、副委員長の永岡慶三先生、向後千春先生を中心とする実行委員会の皆様に、深く感謝いたします。ありがとうございました。また、木原俊行委員長、東原義訓、室田真男副委員長を中心として、丁寧なプログラムを作っていただいた大会企画委員会の皆様に、心から厚くお礼申し上げます。特に、今年から初めての試みが、いくつかありました。

その1つは、ポスターセッションの導入です。はじめは、どのような展開になるのか心配でしたが、ポスターの前で、心ゆくまで熱く議論が交わされました。理事や評議員の先生方も、ポスターに応募され、このポスターを成功させようとする意気込みが、感じられました。もう一つは、事前受付システムの導入です。ちょうど、飛行機のeチケットのように、事前に会員がWebから登録書を印刷して持参するシステムで、きわめて効率的な運営ができました。これは、清水康敬先生の労力によるところが大きく、丁寧に開発をしていただきましたことを、心から感謝申し上げます。さらに、CD-ROM講演論文集の配布も、きわめて重要な変革でした。大会後に、研究室で検索しましたら、スムーズに論文を閲覧することができ、仕事に大いに役立ちました。

内容も濃く、多くの会場で立ち見席が出ました。シンポジウムIでは、木原俊行先生のコーディネート、清水康敬編集長の下で、ホットな議論で会場が大いに沸いたと聞きました。シンポジウムIIでは、山西潤一先生のコーディネートの下で、難しい内容ではありましたが、教育工学の研究方法論の展開と限界について、考察を深めることができました。

今年は、韓国教育工学会の会長で、梨花女子大学のKang教授を招待し、挨拶をいただき、拙宅にも立ち寄っていただきましたが、これからの日韓の交流にとって、大変良い経験だったと思います。

来年は、10月11日から13日に、上越教育大学で開催されます。大勢の皆様にお会いできるように、祈っております。どうか、よろしく申し上げます。

### 本号目次

第23回日本教育工学会全国大会の御礼	1	産学協同セミナーのお知らせ(第一報)	12
全国大会の報告	2	論文誌特集号のご案内(第二報)	13
研究奨励賞候補者推薦のお願い	6	論文誌ショートレター増刊号のご案内(第二報)	14
研究会の開催案内/発表募集/報告	7	理事会議事録	15
冬の合宿研究会のお知らせ(最終報)	11	新入会員/学会日誌等	16

# 日本教育工学会第 23 回全国大会報告

大会企画委員会委員長 木原俊行（大阪教育大学）  
大会実行委員会委員長 野嶋栄一郎（早稲田大学）

第 23 回大会は、9 月 22 日（土）～24 日（月）の 3 日間、早稲田大学人間科学部（所沢キャンパス）を会場にして開催されました。参加者数は 921 人、発表件数は 457 件という、大規模な大会となりました。たくさんの参加者を迎える会場は、緑豊かなキャンパスに位置し、またモダンな建物と快適なスペースを擁していました。そしてなにより、開催校のスタッフの方々がきめ細かな配慮で参加者を迎えてくださり、気持ちよく発表や討論をおこなうことができました。スタッフの方々に、厚く御礼申し上げます。

さて、本大会では、例年どおり、シンポジウム、課題研究発表、一般研究発表、そして企業展示等が企画・運営されました。大会第 1 日目は、一般研究発表 1（8 会場、International Session を含む）で始まり、午後には 2 つの並行シンポジウムと一般研究発表 2（12 会場）が催されました。各会場とも盛況で、活発な議論が繰り広げられました。新たに導入された受付システムも、事前参加申込者に参加証等をメールで送信しておいたため当日は受付での混乱を避けることができ、大会の円滑な運営に大きく役立ちました。また、これも新機軸たる、論文集の CD-ROM 化も好評でした。

大会 2 日目には、午前中に一般研究 3 のセッション（17 会場）が催されましたが、ここにポスターセッションが導入されました。初めての試みで運営に不安な面もありましたが、幸い、会場校の早稲田大学のスタッフの方々のご尽力により、極めて充実した議論の場が成立しました。同日の午後は、全体会とシンポジウム、懇親会というプログラムでした。全体会では、ご招待した、韓国教育工学会の学会長から挨拶を賜ることができました。また、これまでと同様に、研究奨励賞と論文賞の発表・表彰が行われました。シンポジウムでは、赤堀会長による基調講演をもとに、教育工学研究のフィロソフィーについて、多面的に議論する場が構成されました。懇親会は、会場内のレストランで開催されましたが、会長や実行委員長、ご来賓の方々のご挨拶に続き、次期開催校の上越教育大学の南部先生から次回大会開催の意気込みを示していただき、大いに盛り上がりました。

大会 3 日目には、午前中に一般研究発表 4 のセッション（13 会場）が、また午後には課題研究発表のセッション（8 会場）が設定されましたが、いずれにおいても、熱心な議論が繰り広げられました。

3 日間連続で催された企業展示についても、参加者が足を運びやすいスペースを会場校にご用意いただき、会員が企業の製品等にふれることのできる、よき機会となりました。

以上のように、3 日間を通じて、成功裏に大会の幕を閉じることができました。参加いただいた会員の皆様とそれぞれの立場で大会開催にご協力いただいた方々に御礼を申し上げます。以下に、それぞれのセッションの詳細を報告します（登壇者の敬称は略します）。

## シンポジウム 1A: e-Learning が変える高等教育システムー伝統的学部・大学院教育の改変: 研究・教育そして人材育成ー

コーディネータ: 野嶋栄一郎, 松居辰則(早稲田大学)

司会者: 松居辰則(早稲田大学)

高等教育機関での e-Learning の利活用は一般的になりつつあるが、その多くは従来型の学部教育や大学院教育の実施を前提としてそれを補完することや学習の機会を拡大することが中心的な目的となっている。しかしながら、e-Learning を導入することの本来的な目的は学生の学力や質の向上は言うまでもなく、教員の教育・研究に対する意識改革、授業スキルの向上、組織の発展的改変、ひいては学部や大学院の組織基盤として機能させることにある。これを実現するためには、従来型の学部・大学院教育においてどのような e-Learning のモデルを構築すればよいのか、そしてそれを実効性の高いものとならしめるためには、どのような組織構成を考えればよいのか。本シンポジウムでは上記のような意識のもとで e-Learning を導入している 4 大学から話題提供をしていただいた。「人材育成」をキーワードにして、その基盤となる入学時基礎教育における多様な能力への対応（千歳）、生涯学習支援（早稲田、信州）、e-Learning による e ラーニングの専門家庭教育（青山学院）、そして e-Learning にかかわることによる大学院生および教員の質的向上にまで話が及んだ（早稲田）。フロアからも積極的な意見があり、世界的な人材流通まで視野に入れた組織改革基盤としての e-Learning の位置づけの重要性が明確化された。

## シンポジウム 1B: 実践研究をどのようにデザインし、論文にまとめるか

コーディネーター・司会者: 木原俊行(大阪教育大学), 清水康敬(メディア教育開発センター)

報告者: 益子典文(岐阜大学), 山内祐平(東京大学)

コメンテーター: 植野真臣(電気通信大学), 鈴木克明(熊本大学), 矢野米雄(徳島大学)

本シンポジウムは、大会企画委員会と編集委員会が連携して、企画・運営する、新しい試みであった。会場が満席となるほど多くの参加者を得て、このテーマが、現在、会員の関心に合致していることが再確認された。

まず、山内氏と益子氏が、それぞれがデザインし、実行し、そして論文にまとめた実践研究のエッセンスを報告した(益子氏の場合は、論文では第二著者)。前者は「学校と専門家を結ぶ実践共同体のエスノグラフィー」に関する記述的研究であり、後者は「小学校理科授業における話し合い活動を促進する授業ルーチンの導入法」に関する開発的研究であった。同時に、両氏は、それらに着手した経験を踏まえ、実践研究推進上の課題を論じた。

続いて、コメンテーターの鈴木・植野・矢野氏が、それぞれの立場から、山内・益子氏の報告等を批評するとともに、教育工学分野の実践研究に期待される要素や特徴について提案した。それらは、実践を構築するための理論の存在、社会的要求のあるトピックスを扱っていること、新しい技術やコンセプトを用いていること等であった。その後、事例報告者及びコメンテーターによる討論、司会者の整理やフロアからの意見表明等を経て、最後に、実践研究のデザインや論文が満たすべき要件に関して、司会者が整理を試みた。

## シンポジウム2: 教育工学研究に望まれる方法論-実践・政策・市場原理を踏まえたデザイン-

コーディネーター・司会者: 山西潤一(富山大学)

登壇者: 赤堀侃司(東京工業大学), 香山瑞恵(信州大学), 黒川弘一(光村図書出版),

佐伯 胖(青山学院大学), 堀田龍也(メディア教育開発センター), 前田康裕(熊本市立飽田東小学校)

本シンポジウムでは、赤堀会長から学会の重点課題とした「教育方法・システムを高度化する教育工学研究」の特徴と、それに関わる研究デザインについてのレビューが行われ、教育政策、市場原理、教育研究、実践研究における研究方法の関連と統合に関する提言がされた。これを受けて、前田氏が授業実践者の立場から、柔軟性の高い ICT 教材と ICT 活用研究の方向性や産学共同研究の必要性について論じた。続いて、黒川氏が教育産業の立場から、デジタル教科書の開発やその活用事例を通して、授業設計における ICT 活用の位置づけの明確化、活用アイデアの共有化について提言された。システム開発の立場から香山氏は学習技術と教育技術を統合した日本発の教育工学研究の必要性を論じた。続いて堀田氏が教育行政の立場から、理論的・学術的に説明責任が果たせるようなデータの提供を教育工学に期待する旨の提言があった。最後に、佐伯氏が認知科学の立場から、メタ理論的論争を抱えた学問としての学習科学を例に出し、教育工学が単に技術を追い求めるのではなく、方法の根拠を突き詰める哲学的議論こそ求められると警鐘を鳴らした。フロアを交えて、異なる立場での教育工学の価値を相互に共有し、協調する研究デザインのあり方について活発な議論が行われた。

## 課題研究 1: モバイル・ユビキタス技術の教育利用

コーディネーター・司会者: 中原 淳(東京大学), 林 敏浩(香川大学)

本課題研究は、モバイル・ユビキタス技術の教育利用に関係する提案・開発・実践などに関して6件の発表でセッションを構成した。村井(金沢星陵大学)らは教員の課題・問題解決の方法として SNS の利用に着目し、SNS の利用状況などをアンケート調査し、その結果を報告した。同じ課題を持つ教員の相談の場として SNS が利用されたり、また、期待されていることが報告された。高田(海の中道海洋生態科学館)らは、携帯電話と SNS を活用した水族館に関する調べ学習・まとめ学習、水族館スタッフとの教育実践などを報告した。また、アンケート分析などより好評であることが示された。小暮(青山学院大学)らは、モバイルラーニング環境として携帯電話に関するアンケート調査および得られた知見を報告した。新しい携帯電話はモバイルラーニングのプラットフォームになりうることで、学生は PC より携帯電話を頻りに利用することなどが示された。八重樫(立命館大学)らは、PBL 支援システム ProBo (および ProBoPortable) の改良として、他者・他グループの活動(会話などを含む)を参照できる工房・スタジオの学習環境の特徴を持つ機能の付加と、その評価を報告した。中原(東京大学)らは、企業教育向けモバイル英語リスニング学習システム「なりきり English!」を報告した。本システムは、利用文脈にあったスキットラーニングを提供し、モバイル機器を用い隙間時間を利用し学習できる。大橋(慶応義塾大学)らは、「Being-いきていること展」という動物園のプロジェクトに関して報告した。携帯端末として iPod などを活用したユーザ参加型の様々な取り組みが紹介された。最後に、モバイル・ユビキタス技術の教育利用に関して全体討議をした。モバイル機器は隙間時間を学習時間にでき

るツールでそれにあつたコンテンツ作成が求められている、学習者が能動的にアクションできる新しい技術が望まれるなど、様々な意見が出た。

## 課題研究 2: 学習方略フィードバックのための学習コンテンツの構成と学習データの利用

コーディネータ: 松居辰則(早稲田大学), 室田真男(東京工業大学)

司会者: 松居辰則(早稲田大学), 米澤宣義(工学院大学)

ICT を利用した、特に Web 型の学習支援システム(広義の e-Learning) では、学習方略に関するフィードバック(学習内容の個別適応化、学習評価など)をいかに行うかが重要なポイントとなる。本課題研究では、それを実現するための、学習コンテンツの構成法、インデックスの作成や付与方法(自動化技術も含めて)、学習評価のための各種データの利用方法と可視化、その理論、技術、実践など、e-Learning において学習方略をどのように捉え、どのようにフィードバックするのかについて議論し、問題点と課題を共有することを目的に発表を募集した。その結果、「情報科学教育における大学初学年用学習コンテンツの開発と評価」、「携帯電話対応コメントカード DB とテキストマイニングを連動させた学習者の自由記述分析システムの開発と評価」、「データマイニングを活用した学習方略フィードバックシステムの開発と評価」、「多人数講義における学習機会の拡張と形成的評価のフィードバック」、「e-Learning システムにおける人間教師の役割—青山学院大学「IT 講習会」の事例から—」に関する発表(5 件)が採択され発表があつた。コンテンツの構成方法論のみならず、データマイニング等の技術も実用段階にあるとの印象を受けた。ICT を巧みに活用した形成的評価の実現の可能性も示唆された。また、e-Learning においては、その全てを自動化するのではなく、人間教師の関わりが重要であることは言うまでもないが、その人間教師の営みや意思決定のための強力なツールを提供することは、結果として e-Learning の質を向上させることにつながる。従つて、e-Learning における人間教師との関わりが極めて重要であることが改めて認識された。

## 課題研究 3: ICT 技術・教育システムの評価の視点と方法

コーディネータ: 池田 満(北陸先端科学技術大学院大学), 中山 実(東京工業大学), 平嶋 宗(広島大学)

司会者: 池田 満(北陸先端科学技術大学院大学)

ICT を基盤とした新しい教育・学習のあり方を提案していくことは、教育工学における重要な課題の一つであるといえ、数多くの研究が行われている。しかしながら、提案された新しい形態の教育・学習をどのように評価すべきかは、必ずしも明らかではない。教育・学習の目標を何らかの測定によって評価することが最終的には必要であることに合意できたとしても、どのように評価するか自体が大きな課題である。また、新しい技術あるいはデザインを生み出そうという立場からすると、限られた評価手法によって教育・学習における効果を測定することは、必ずしも妥当とはいえない。このような問題意識を踏まえて、本課題研究では、最初に「評価の視点と方法」に関する発表(4 件)がなされ、それを受けた形式で発表者を中心にフロアも交えて様々な観点から活発な議論が行なわれた。平嶋(広島大学)は、教育現場で長期にわたつて評価実験を行った経験から、その意義と困難さを紹介した。特に、研究仮説に学術性を求めた場合に、それを現場と共有することの難しさに関するエピソードは、フロアの共感を集めた。中山(東工大)は統計的手法を用いた教育システムの評価の方法について、適用対象・仮説・手法の組み合わせを、理論的に合理的に選定することの重要性を、実例を交えながら紹介した。大岩(慶応大)は自らの研究・開発・評価を遂行した経験に基づいて、教育・訓練システムのデザインにおいて見逃されている重要な教育手法の指針が多いことから生じる問題を論じた。大谷(名大)は、学校教育の仕組みや学校文化を理解したうえで、テクノロジーの開発・普及・評価のデザインループを合理的に進めることの重要性を様々な視点から論じた。この問題提起はそれに続くディスカッションの中心テーマとなつた。教育システムの評価について異なつたテストをもつた教育工学の研究者(フロアも含む)が活発かつ率直に意見を交換することができたという点において、非常に有意義な場であつた。

## 課題研究 4: 教科指導における ICT 活用の効果分析とそれに基づく授業デザインの研究

コーディネータ・司会者: 小泉カー(尚美学園大学), 高橋 純(富山大学)

本課題研究は、授業に ICT を活用して児童生徒の学力向上につなげた実践事例を教育工学的見地から分析し、より多くの教員が自らの授業で ICT 活用することを目的に、4 件の発表が行われた。山崎(日本私学教育研究所)は、中等教育での語学指導における e-Learning 利用の効果について報告した。授業の補完として利用することに効果があり、成績上位者の利用が多く、学習者の評価が高いだけでなく継続的な利用を望んでいること等を示した。高橋(富山大学)らは、小学校の教科指導における効果的な ICT 活用場面について報告した。効果的な活用事例には、プロジェクタと実物投影機を用いて、理解を促すために教科書などを映すことが多いこと等を示した。稲垣(東北学院大)らは、電子黒板の普

及モデル構築に向けた活用状況の調査結果について報告した。活用頻度の高い教科、授業場面を示し、普及のためには電子黒板の活用イメージと得られる効果を明確にする必要性等を示した。山本（熊本県立教育センター）らは、ICT活用授業による学力向上に関する総合的な分析と評価を報告した。全国の学校を対象に、客観テスト、意識調査を行った結果から、授業にICTを活用することで児童生徒の学力が向上すること等を示した。全体討論では、ICT活用の普及のための方略や効果的な活用方法について議論が行われた。メーカー主導ではなく学校現場からの意見の重要性、特に学校現場に根ざした機器の導入が必要であることや、ICT活用の効果を証明することの意味、教師の授業スタイルに合わせてICT活用を検討する必要性などが議論された。今後もICT活用に関して、より詳細な授業デザインの検討が必要と感じさせる議論であった。

### 課題研究 5: 教育サービスとしての e-Learning 導入の検討

コーディネータ: 赤倉貴子(東京理科大学), 金西計英(徳島大学), 田口真奈(メディア教育開発センター)

司会者: 金西計英(徳島大学), 田口真奈(メディア教育開発センター)

本課題研究は、e-Learning を教育サービスとしてとらえた場合、大学全体の IT 化についてのグランドデザインが不可欠であることに鑑み、個々の活用事例ではなく、機関全体で IT 化に取り組む事例では効果をどのように導いているかについて検討することを目的として、4 件の発表が行われた。今井氏は、岐阜大における働きながら学ぶ現職教員のためのインターネット大学院について紹介した。黒田氏は佛教大通信教育課程におけるスクーリングとのブレンディッド e-Learning が学費の抑制、幅広い年齢層への対応等に効果があったことを示した。江本氏は FD 活動を日常に取り入れるという立場から岩手大に教育支援システムを導入した事例を紹介した。梶田氏は個別対応から基盤対応へという立場でのコミュニティソースを基盤とした名古屋大の取り組みを紹介した。このように機関全体で取り組まれている様々な e-Learning 実践が集まり、その効果について議論が展開された。機関をあげて取り組む e-Learning の何をもってうまくいったと考えるかについては、受講者がどれほど来たか、卒業生が出た後に後輩が続くかどうか(今井氏、黒田氏)、教員がどの程度システムを利用したか(江本氏)、どれほど感謝されたか(梶田氏)などの意見が出された。つまり、単に実践したことをもって終わるのではなく、運用を継続し、コストパフォーマンスにまで議論を進め、教職員、学生いずれもが負担にならず、それぞれにメリットがあるような体制にしていく必要があるということであり、これは多くの参加者の意見の集約でもあった。e-Learning は多種多様化しているが、参加者は、IT 化についてのグランドデザインが必要であり、そのためにこれまでのノウハウを体系化していくことの重要性を再認識できたと思われる。

### 課題研究 6: 教育工学関連製品を企業の開発者自身が点検・評価・検証する

コーディネータ: 井上義裕(日本電気), 大久保 昇(内田洋行), 奥田 聡(富士通), 栗山 健(学習研究社), 鈴木克明(熊本大学), 高井尚一郎(内田洋行), 野澤敏夫(東京書籍)

司会者: 大久保 昇(内田洋行), 中川一史(金沢大学)

本課題研究では、企業の開発者自らの検証研究として6件の発表があった。梅香家(内田洋行)からは学校 Web サイトへの保護者ニーズの調査分析と CMS について、太田(パイオニア)からは電子黒板のインターフェース改良について、森下(光村図書)からは国語デジタル教科書の導入効果調査を、田村(内田洋行)からはコンテンツ配信サービスの利用実態調査から、堀内(日本電気)からは PC 教室支援システムの開発経過から、菅(富士通四国)からはシンクライアントとクライアント管理システムの比較調査についての発表があった。参加者からユーザからのヒアリングや学校での実態調査の難しさについての意見があったが、今回の発表者はその点では多くのパイプを持っていて問題は無かったものの、新規参入者には高い障壁であり、何らかの仕組み作りが必要となるであろう。もっとも時間を議論にさいしたのは、製品の評価検証のモデルが存在していないということである。研究者も交えて今後の深堀を期待したい。全ての発表とも非常にレベルの高いものであり、今後の大会でも多くの企業開発者の発表が望まれる。司会の労をとっていただいた中川氏から、企業、学校・教員、それに加えて研究者や先行モデル事例に関わる教育関連機関、その三者の新しいコラボレーションの関係の構築が日本の教育現場を良くしていくために望まれる、という貴重な提言が最後にあったこともあわせて報告する。

### 課題研究 7: 情報教育カリキュラムの再検討ー新学習指導要領・情報モラル教育の重点化を受けてー

コーディネータ・司会者: 久保田賢一(関西大学), 中橋 雄(福山大学),

堀田龍也(メディア教育開発センター)

本課題研究では、情報モラル教育を含む情報教育に関する理論的・実践的な研究の成果を踏まえ、これからの情報教育カリキュラムを展望する 5 件の発表があった。尾崎(札幌市立平岡中)からは、す

すべての教員が情報モラルの指導に取り組めることを目指した授業が報告された。学活、総合、道徳、国語を横断した計 12 時間で、自信のなかった教師でも実践できたということである。小林（神奈川大附属中・高）からは、実態調査を行った上で開発した中・高を見通したカリキュラムの報告がなされた。携帯電話でのネット利用が多いことを受け、携帯電話安全教室を授業で実施したことなどが特徴的であった。田邊（慶應義塾湘南藤沢中・高）からは、ラジオ番組の制作を通して情報モラルを学ぶ教育方法が提案された。制作過程に情報モラルを位置づけ、受け手の立場を考えた表現や著作権について学ぶものであった。寺嶋（長崎大）らは、情報モラル教育のスコープ（領域）と指導法を検討した上で、モラルジレンマ教材を用いた指導方法が提案された。試行的実践に基づき、学習者が考える活動の重要性を指摘するものであった。玉田（東京経営短期大）らは、情報モラル教材や研修の存在に対する教師の認識不足を調査で明らかにした。年間指導計画の重要性と管理職のリーダーシップや情報推進リーダー養成の必要性が指摘された。全体討論では、政策と学校現場の間にあるギャップを埋める情報教育カリキュラムの在り方について議論が行われた。情報化の光と影を関連させたモラル指導、単なる法やルール理解だけでなく自分で考え課題解決する授業デザインの重要性が話し合われた。情報モラル概念と教育方法の体系化について、学会として議論を重ねていく重要性を感じさせるものであった。

### 課題研究 8: 教員の ICT 活用指導能力を高める養成・研修と実践

コーディネーター・司会者: 新地辰朗(宮崎大学), 東原義訓(信州大学)

本課題研究では、教員の ICT 活用指導力に関わる研究や教育実践について 5 件の発表があり、文部科学省の「ICT 活用指導力のチェックリスト[以降、チェックリストと記す]」と関連づけた議論が行われた点に特徴が見られた。清水（メディア教育開発センター）らは、ICT 活用指導力が教員にどのように捉えられているかを因子分析による教員の能力分類として報告した。野中（和歌山大学）らは、英国における ICT の条件整備と ICT 活用指導力の関係について日本との比較とともに報告した。小柳（奈良教育大学）は、ICT 活用における日米の比較及び小学校での取り組みをもとに組織の成長を促す ICT 活用指導力研修について報告した。野村（埼玉大学）は、担当した各種研修会における質問紙調査の内容分析をもとに教員の ICT 活用に対する抵抗感について報告した。五十嵐（東京都日野市教育委員会）らは、チェックリストを参考にした研修とその効果について報告した。全体討論では、チェックリストが、教員研修や日々の教育改善において、ICT の教育活用を具体的に考案するのに役立っているとの意見で一致した。また、18 項目の文言に縛られることなく、その場での教育的文脈や教員の意図に沿う柔軟な解釈が、チェックリストの有用性を高めるとの意見が複数出された。ただし、今回のチェックリストと教員に求められる指導力全般との比較検討が必要との指摘があり、他学会との協働協議を求める意見もあった。今後、アドバンス版や管理職用のチェックリストの提案を期待するとともに、教員養成・教員研修の質的向上に反映させてゆくことが肝要との意見で一致した。

## 研究奨励賞候補者をご推薦ください

第 23 回全国大会（早稲田大学）の研究発表者の中から、研究奨励賞の候補者を下記の要領でご推薦下さい。

発表をお聞きになっていない場合でも、論文集をご参考をお願い申し上げます。

[推薦用紙は、14 頁 締め切り：2007 年 12 月 31 日(月)]

#### 選考の基準

1. 選考対象者は、本学会の会員であって、受賞時に 40 歳を越えていないこと。ただし、本学会入会時から 5 年を経過していない場合は考慮する。
2. 選考時点から遡って最後の年次大会での正式の研究発表登壇者であること。
3. 既に研究奨励賞を受賞している者でないこと。
4. 対象者の過去の研究業績を尊重すること。

注：研究奨励賞（1985 年 10 月 31 日 理事会申し合わせ）

「研究奨励賞は、教育工学および関連領域に関する学問の奨励のため、有為と認められる新進の研究者に贈呈する。この奨励賞を受ける者は、本学会会員であり且つ研究大会において講演を行った中から、優秀な論文を発表した者から選定する。」

なお、理事・評議員・大会役員・座長担当者の方は率先してご推薦下さいますようお願い申し上げます。

## 研究会の開催

研究会  
2007

## テーマ

## 一般高等教育とeラーニング／一般

- 日 時：2007年12月22日（土）
- 会 場：熊本大学工学部 2号館 2F 221, 222, 224, 225号教室  
熊本市黒髪2-40-1
- 担 当：根本 淳子（熊本大学） [nemoto@kumamoto-u.ac.jp](mailto:nemoto@kumamoto-u.ac.jp)  
TEL: 096-342-2895

## プログラム

発表時間：発表1件につき25分（発表20分程度，質疑5分程度）

会場：A会場（221教室） B会場（222教室） C会場（224教室） D会場（225教室）

## 9:30- 9:40 開会挨拶・諸連絡

## 9:40-11:45 午前の部

- A1) 小学生を対象とした日本語キーボード入学習システム「キーボー島アドベンチャー」の利用状況  
堀田龍也（メディア教育開発センター）高橋純（富山大学）
- A2) 情報教育のための子供向け Web ブラウザの開発  
長谷川遼太・牧田裕喜・佐々木整（拓殖大学）
- A3) 児童が共同構築する図書ブログにおける検索が情報発信能力に及ぼす効果  
須田幸次・永田亮・掛川淳一・森広浩一郎（兵庫教育大学）
- A4) 教員に Web 上の情報をリコメンドする機能を搭載した教育情報配信システムの開発  
山田智之（内田洋行）堀田龍也（メディア教育開発センター）石塚丈晴（静岡大学）  
畠田浩史・青木栄太・笹田森・伊藤博康（内田洋行）
- A5) テキストマイニングによる管理職が CMS から発信した情報の分析  
森下孟・東原義訓（信州大学）
- 
- B1) 教員養成における複合的なスタンダードの設定とアセスメント，メンターシップの関係  
小柳和喜雄（奈良教育大学）
- B2) 教師のデジタル教材評価の重要性に対する意識調査  
亀井美穂子（相山女学園大学）稲垣忠（東北学院大学）
- B3) Web 教育実習ノートシステムの開発  
加藤隆弘・松能誠仁（金沢大学）中川一史（メディア教育開発センター）  
井原良訓・鷲山靖（金沢大学）
- B4) 林間学校型実践的指導力向上プログラムの開発と実践～ICTを活用した省察情報の蓄積と共有～  
鷹岡亮・香川真吾・田村香菜恵・高田和宜（山口大学）山下昌（下関市立豊東小学校）  
阿濱茂樹・霜川正幸（山口大学），牛島昌哉・小林道正（国立山口徳地青少年自然の家）  
友定保博（山口大学）
- B5) 授業分析での表情・状況の把握におけるハイビジョン映像の有効性  
山本朋弘（熊本県立教育センター）清水康敬（メディア教育開発センター）
- 
- C1) 大学の英文輪読ゼミナール支援のための学生の翻訳方法とその支援に関する研究  
柳沢昌義（東洋英和女学院大学）
- C2) CALL 教材とフィールドワークを取り入れた授業デザインと評価  
二宗美紀（立命館大学）村上正行・石川保茂・クレイグ スミス・下村秀則（京都外国語大学）
- C3) 日本語非母語話者のための理工系論文表現支援システムの試作と評価  
中野てい子（九州大学）柳沢昌義（東洋英和女学院大学）
- C4) 英語リスニング課題遂行時における認知的負荷に関する母語の影響  
木下徹（名古屋大学）大石晴美（岐阜聖徳学園大学）
- C5) 知的・発達障害児の国語指導におけるコンピュータ教材の利用  
永田真吾・東原文子・吉田直樹（筑波大学）
- 
- D1) 公立小中学校における電子提示装置等の利用の現状と理想の環境に関する調査  
石塚丈晴（静岡大学）堀田龍也（メディア教育開発センター）野中陽一（和歌山大学）  
笹田森・山田智之（内田洋行）

- 
- D2) 算数科における電子黒板による児童の発表場面に関する事例研究  
嶺岸正勝(東北学院大学) 佐藤靖泰(富谷町立成田東小学校) 稲垣忠(東北学院大学)
- D3) 英国の教育における ICT の普及の背景  
野中陽一(和歌山大学) 堀田龍也(メディア教育開発センター)  
Avril M.Loveless(ブライトン大学)
- D4) 教養教育における 3D デザインソフトウェアを活用した教室環境デザイン  
古川健一(福岡教育大学)
- D5) e-learning 画面の講師画像が動画か静止画かによる効果の違い  
高橋純(富山大学) 堀田龍也(メディア教育開発センター) 山西潤一(富山大学)

**12:45-14:25 午後の部第一部**

- A6) メディアに対する批判的思考の測定と学年間比較  
後藤康志(新潟医療福祉大学)
- A7) インターネット詐欺対策意識を向上させる学習用コンテンツ  
清水健太郎(群馬県立女子大学)
- A8) 感情方略に着目したメディア選択に関する分析  
加藤尚吾(早稲田大学) 佐藤弘毅(名古屋大学) 加藤由樹(東京福祉大学)
- A9) 電子メールコミュニケーションにおける感情方略に関する分析—四種類の感情場面に着目して—  
加藤由樹(東京福祉大学) 加藤尚吾(早稲田大学) 佐藤弘毅(名古屋大学)

- 
- B6) CMS による入学前課題の試み  
渡邊景子・工藤清美・高山文雄(いわき明星大学)
- B7) PowerPoint を用いたストーリーテリングの制作実践  
宮地功(岡山理科大学)
- B8) ブレンディング授業における日常的な評価と学習者の定着  
原克彦(目白大学)
- B9) E-learning における低学力者への学習指導  
張栄(西日本工業大学)

- 
- C6) 統合型ドリルシミュレーション「ドリル工房」の知的技能への対応  
市川尚(岩手県立大学) 高橋暁子(アイフェース) 鈴木克明(熊本大学)
- C7) Google ガジェットを利用した Web ベース小テストシステムの開発  
河野悠太・牧田裕喜(拓殖大学) 志子田有光・加藤和夫(東北学院大学) 佐々木整(拓殖大学)
- C8) 個人対応の学習課題探索を目的としたナビゲーション機能～Xoops と Moodle 併用による実現～  
磯本征雄・近松亮・津森伸一・伊藤敏(岐阜聖徳学園大学)
- C9) 自由記述メッセージからの学習者の特徴表現抽出  
森田千寿・永田亮・掛川淳一・須田幸次・森広浩一郎(兵庫教育大学)

- 
- D6) 共に学ぶための学習プラットフォームの開発  
吉崎弘一(園田学園女子大学)
- D7) ICT を活用した協調的なライティング学習支援環境の設計と評価  
宮原詩織・野澤亜伊子(ベネッセ教育研究開発センター) 尾関智恵・三宅なほみ(中京大学)
- D8) ブレンディド型文章作成指導におけるグループワークの効果  
富永敦子・向後千春(早稲田大学)
- D9) 研修と実践を継続的につなぐ現職教員のための遠隔研修コースの開発—長期的・改善指向の研修コース設計の検討—  
戸田俊文(熊本県立教育センター) 益子典文(岐阜大学) 川上綾子(鳴門教育大学)  
宮田敏郎(熊本県教育庁)

**14:40-16:45 午後の部第二部**

- A10) 学校間交流学習における相手意識とコミュニケーション力についての考察  
稲垣忠・佐藤麻衣子(東北学院大学) 田村直也(宮城教育大学)
- A11) 相互支援型交流システムを用いた離島校と大学間の交流促進に関する考察(2)  
園屋高志・関山徹(鹿児島大学)
- A12) CMS を用いた学生の学外活動支援システムの開発  
辻利則・竹野茂・森部陽一郎・川瀬隆千・田中宏明(宮崎公立大学)
- A13) 課題解決的学習を非同期に支援する遠隔 TA の支援手法について  
鷹岡亮・児玉あゆみ・岩佐信一(山口大学) 片山美樹・渡辺芳雅(誠英高等学校)  
堀川隆史・林徳治(山口大学)
-



A14) 授業資料作成支援システムの構築, 資料再構成支援機能の実装  
羽根昭裕・藤澤公也 (東京工科大学)

B10) 教科情報導入後の大学新生に対する情報リテラシ科目について: プロジェクト学習の導入  
奥田隆史・吉岡博貴・岩田真之 (愛知県立大学)

B11) 高校普通教科「情報」履修者の応用ソフトウェア学習有無による大学情報リテラシ講義の習熟度への影響

山岸正明・石田雅・大野賢一・西田英樹・井上仁 (鳥取大学)

B12) 普通教科「情報」履修者の Web 情報に対する検証行動の分析  
井田信也・掛川淳一・森広浩一郎 (兵庫教育大学)

B13) 模擬問題形式の e-ラーニングプログラムを活用した情報リテラシー向上のための取り組み  
田所耕哉 (中村学園大学)

C10) 項目応答理論とニューラルテスト理論の比較研究

山川修 (福井県立大学) 荘島宏二郎 (大学入試センター)

C11) 学習者間のネットワーク構造が学習効果に対して与える影響

安武公一 (広島大学) 山川修 (福井県立大学) 多川孝央 (九州大学) 隅谷孝洋 (広島大学)  
井上仁 (九州大学)

C12) 学習者特性対応型 e-ラーニングシステムの開発と運用

中村峻・稲葉竹俊・松永信介 (東京工科大学)

C13) マイコン活用教材を軸としたフィードバックモデルの学習に関する実践教育

河田拓朗・川田徳明 (東北学院榴ヶ岡高等学校) 井口巖・佐藤徳男 (東北学院中学高等学校)  
菅原研・松澤茂 (東北学院大学) 佐々木整 (拓殖大学) 志子田有光 (東北学院大学)

D10) e-ラーニング授業でコミュニケーションカード「e大福帳」を使う  
向後千春 (早稲田大学)

D11) Social Networking を利用したワークショップ型高等基礎教育の試み  
安武公一 (広島大学)

D12) 企業が求める電子・情報系スキルの判定システムの開発  
安藤正樹・清水康敬 (メディア教育開発センター)

D13) e-Learning による社会人向け大学院におけるプロフェッショナル育成への取り組みと課題 II

柴田喜幸 (日本能率協会マネジメントセンター) 根本淳子・北村士朗・鈴木克明 (熊本大学)

16:45-16:50 (A会場) 16:20-16:25 (B・C・D会場) 閉会挨拶・諸連絡

●参加費用: 研究会報告集の年間予約購読代金が入金確認されている本学会会員は無料で参加できます。その他の参加者は本学会会員を問わず 1,000 円 (当日受付にてお支払いください) となります。

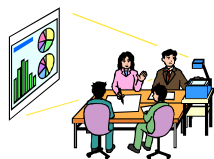
●交通案内: 【熊本空港から】 空港リムジンバス熊本駅行き「通町筋」下車, 「水道町」から市営バス立田口線・楠線または産交バス大津・武蔵ヶ丘方面行き「熊本大学前」下車

【JR 熊本駅から】 市営バス第 1 環状線「子飼橋」下車徒歩 10 分 または産交バス大津方面行き「熊本大学前」下車

詳細は以下のホームページをご覧ください。

<http://www.kumamoto-u.ac.jp/daigakujouhou/campusjouhou/ichizu/>

## 研究会の発表募集



テーマ 日本語教育と教育工学／一般

●日 時: 2008年 3月 1日 (土)

●会 場: 名古屋大学 (名古屋市千種区不老町)

●開催担当: 佐藤 弘毅 (名古屋大学)

●申込締切: 2007年12月20日 (木): 通常より早めです。

●原稿提出: 2008年 1月20日 (日): 通常より早めです。

●募集内容:

日本語教育では, CALL, WBT, マルチメディア教材, e-ラーニング等, 教育工学との共同研究が期待される分野が多くあります。また, 自然言語処理,

●申込方法:

研究会 Web ページよりお申し込みください。

<http://www.jset.gr.jp/study-group/>

コミュニケーション分析、授業分析等、その知見が教育工学研究に活かせるものも多くあります。そこで、本研究会では、両分野の相互理解を促進するような研究を幅広く募集します。具体的には、上記分野に関わる基礎研究や教育実践研究をはじめ、広い意味で日本語教育に応用できるような研究を期待します。

また、上記のテーマにはこだわらない教育工学一般における発表も幅広く募集しております。

●申込期限：2007年12月20日（木）

締切後、申し込まれた方宛に発表の採択結果と執筆要項を電子メールにて送付いたします。

●原稿提出期限：2008年1月20日（日）（厳守！）をお願いいたします。原稿の提出はPDF形式で、研究会Webページの「発表申込フォーム」より、発表申込時に発行された「受付キー」を使用してご登録下さい。

### 今後の研究会の開催予定

開催日	募集テーマ	開催場所
2008年 3月 1日	日本語教育と教育工学／一般	名古屋大学
2008年 5月 17日	テーマ未定	岩手大学
2008年 7月 5日	テーマ未定	金沢大学
2008年 9月 6日	テーマ未定	玉川大学
2008年 12月 20日	テーマ未定	いわき明星大学

●発表申込み締切は概ね開催日の2ヶ月前となります。

●研究会に関するご意見・ご希望、研究会テーマ・企画などありましたらお気軽に研究会幹事までお寄せ下さい。

E-mail: [study-group-core@jset.gr.jp](mailto:study-group-core@jset.gr.jp)

### 年間予約購読のお勧め



●年間購読：研究会報告集の年間予約購読価格は郵送料込みで3,500円です（当日売りは割高になります）。年間5冊、合計500ページ前後で、各研究会平均20件程度（平成18年度実績）の研究発表が掲載されます。詳しくは、学会本部事務局までお問い合わせください。

【学会本部事務局】〒141-0031 東京都品川区西五反田1-13-7 マルキビル

TEL/FAX : 03-5740-9505 E-mail: [office@jset.gr.jp](mailto:office@jset.gr.jp)

### 研究会の開催報告

●日 時：2007年10月20日

●発表件数：36件

2007年10月20日、同志社女子大学において「デジタルコンテンツの教育活用と授業デザイン／一般」というテーマで研究会を開催いたしました。発表件数は36件で、デジタルコンテンツの提供方法、カリキュラムや授業デザインの提案と評価、ICT活用授業の効果などの研究に加え、評価方法、情報モラル、e-Learning、著作権、ユビキタス学習環境、学社連携、Blog、機械翻訳、ワークショップ、諸外国の動向など関連領域の研究も数多く発表されました。幼児教育から初等中等教育、高等教育、生涯学習までと様々な段階での教育が取り上げられ、現職教員による授業実践の発表もあるなど、デジタルコンテンツの教育活用は実践と普及の段階に入っていることを実感させられました。また、評価方法について学習履歴データや生体情報、授業風景の映像の活用など新しい手法の提案があったことはこの領域の研究の進展を印象づけるものでした。お忙しい時期にご登壇、ご参加いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

●会 場：同志社女子大学

●参加者数：約70名



（担当：同志社女子大学 余田 義彦）

## 2007年度 冬の合宿研究会 開催案内（最終報）

### テーマ「授業評価・授業改善におけるテキストマイニングの有効性を探る！」

小・中・高に限らず、大学・大学院教育においても、授業評価・授業改善に取り組むことが必須となりました。その際、学習者による授業感想やアンケート調査における自由記述等のテキストデータの分析が不可欠ですが、膨大な自由記述をどのように読み解いたらよいか誰もが悩むところです。

今まで漠然と眺めるだけだった膨大なテキストデータを分析する方法としてテキストマイニングという手法があります。一体テキストマイニングとはどのようなものなのか、実際にどうやって活用するものなのか、テキストマイニングって面白そうを使ってみたいのだけどよくわからない。そんな人たちのための冬合宿を企画してみました。

日時：2008年2月22日(金)14:00～23日(土)12:30

会場：兵庫教育大学神戸サテライト（神戸情報文化ビル3F）

<http://www.office.hyogo-u.ac.jp/office/access/data/kobesate.html>

対象：テキストマイニングに関心のある研究者および教育現場の方

定員：80名（学会ホームページから受け付けます。定員になり次第締切ります。）

資料代：2,000円 情報交換会：5,000円（予定）

宿泊：各自でご手配をお願い申し上げます。受験シーズンと重なり、混雑も予想されますので早めの手配をお願いいたします。

日程：（詳細は調整中です。変更する可能性があります。）

2月22日(金)

13:30～ 受付

14:00～14:05 開会挨拶

14:05～14:35 各テキストマイニング分析ツールの概要説明と希望調査

14:35～15:50 テキストマイニングとは－社会調査法の視点から－  
樋口耕一（大阪大学人間科学部）

16:00～18:30 ワークショップ－実際にデータを分析してみよう－  
TRUSTIA(ジャストシステム),  
Text Mining for Clementine(SPSS),  
Text Mining Studio (数理システム),  
KH coder(樋口耕一),  
Edu-mining ツール（永田亮・掛川淳一）等を使って

19:00～21:00 情報交換会@風～foo～創作居酒屋（エコール・マリリン18F）

2月23日(土)

09:30～10:45 ワークショップの結果報告  
司会：村川雅弘（鳴門教育大学）

10:50～11:20 テキストマイニングの活用事例と読み解き方  
宮田仁（滋賀大学）

11:25～12:25 授業評価・授業改善におけるテキストマイニングの活用可能性  
－教育技術の視点から－  
西之園晴夫（佛教大学）

12:25～12:30 閉会挨拶

詳細及び参加申し込みは学会ホームページをご覧ください。

お問い合わせ先：冬の合宿担当 永田智子（兵庫教育大学）[tnagata@hyogo-u.ac.jp](mailto:tnagata@hyogo-u.ac.jp)

# 産学協同セミナー開催案内（第一報）

## パネルディスカッション

### ～教育工学における産学協同プロジェクトの在り方～

日時および会場

日時：2008年2月29日（金）14:30～17:00

会場：内田洋行 東京ショールームC3 地下1階 CANVAS

([http://www.uchida.co.jp/contents/tokyo\\_c3.html](http://www.uchida.co.jp/contents/tokyo_c3.html))

アクセス：東京メトロ 日比谷線「八丁堀駅」下車，「A4」出口より徒歩4分

東京メトロ 日比谷線・東西線「茅場町駅」下車，「1番」出口より徒歩5分

JR 京葉線「八丁堀駅」下車，「B1」出口より徒歩5分

今年の産学協同セミナーでは、教育工学における産学協同プロジェクトの様々な形態を紹介するとともに、その手法や可能性について議論します。産学協同プロジェクトに興味をもっている会員に、最初の一步を踏み出すためのヒントときっかけを与えるようなセミナーにしたいと考えています。

産学協同セミナーは、企業に籍をおく会員と大学・研究機関に籍をおく会員の交流を通して、互いに違う立場から刺激しあうことを目的として始められました。これまで、「教育ソフト鑑定団」、「教育システム・コンテンツ アイデアマーケット」といった企画をおこなってきました。これらは、企業と大学の間での情報交換を促進し、それをきっかけに新たな産学協同プロジェクトが生まれることを期待した企画でした。

しかしながら、実際に産学協同プロジェクトを立ち上げるのには不安もありますし、わからないことも多いのではないのでしょうか。そこで、今回の産学協同セミナーでは、現在、産学協同プロジェクトに取り組んでいる方をお呼びして、プロジェクト開始の経緯と現状、これまでに直面した問題点とその解決方法、プロジェクトをうまく進行させるためのノウハウ等について、具体的なケースに基づいて報告していただきます。大学、企業双方のプロジェクトメンバーからの報告を計画しています。また、一口に産学協同プロジェクトといっても、組織間の提携に基づく大規模なものから、個人ベースの小規模なプロジェクトまで存在しますので、このセミナーでは、タイプの違う、いくつかのプロジェクトを取り上げる予定です。

<セミナーのタイムスケジュール(予定)>

14:30～14:40：セミナーの趣旨説明とケース紹介者の紹介

14:40～15:00：ケース案1：大学・企業間の包括協定による協同プロジェクト

15:00～15:20：ケース案2：研究室単位でおこなう協同プロジェクト

15:20～15:40：ケース案3：NPOとおこなう協同プロジェクト

15:40～15:50：フロアからの質問、コメント回収

15:50～16:00：休憩

16:00～16:10：指定討論者（交渉中）のコメント

16:10～16:30：ケース紹介者より、質問・コメントに対する回答

16:30～17:00：全体討論・総括

詳細については、学会ホームページに掲載します

# 日本教育工学会論文誌

## 特集号「学力向上を目指した ICT 活用のデザイン・実践・効果」のご案内（第二報）

近年、我が国においては児童・生徒等の学力向上の重要性が声高に叫ばれるようになってきました。ここでいう学力は、知識・理解に限定されるものではなく、例えば思考・判断力、問題解決能力、情報活用能力を含むものとしてとらえられますが、現在、これらの学力の向上と ICT 活用の接点を見いだそうとする努力が、実証的・実践的に重ねられてきています。

このような潮流を踏まえ、本特集号では、学力向上を期した ICT 活用のデザインと実践、その効果等について、総合的に検討することを試みます。その内容は、学力向上を目指した ICT 活用の授業モデル、特色ある実践、その効果の検証を支柱としつつ、ICT 活用を推進するシステム等の開発研究、教員の ICT 活用指導力の向上を図る教員養成カリキュラムや現職教育プログラムの開発研究等も含まれます。特に今日、初等中等教育における児童・生徒の学力向上を期した ICT 活用が政策的に推進されており、日本教育工学会としてこの分野の知見を整理することが求められていることから、初等中等教育における学力向上と ICT 活用に関わる研究が数多く投稿されることを期待します。

### 1. 対象分野

- (1) 学力向上を目指した ICT 活用の授業デザイン
- (2) 学力向上を目指した ICT 活用の特色ある実践
- (3) ICT 活用の基盤を成す教授学習理論
- (4) ICT 活用による学力向上の効果測定・検証やその手法に関する研究
- (5) 学力向上を目指した ICT 活用の実態に関する広範囲の調査
- (6) 教員の ICT 活用指導力に関する測定・調査
- (7) ICT 活用指導力の向上を目指した教員養成カリキュラム
- (8) ICT 活用指導力の向上を目指した現職教育プログラム
- (9) 育成を図る学力等を視点とした ICT 活用の歴史や系譜
- (10) 育成を図る学力等を視点とした ICT 活用の国際比較
- (11) 学力向上を期したハードウェア・ソフトウェアの開発と効果
- (12) 学力向上を期した学習コンテンツ・学習支援システムの開発と効果
- (13) 大学生等に対するリメディアル教育における ICT 活用の実践と効果
- (14) その他、学力向上を目指した ICT 活用に関する研究

### 2. 募集論文の種類

通常の論文誌と同様に、「論文」「資料」「寄書」を募集します。投稿規程ならびに査読は、通常の論文誌の場合と同じです。なお、「ショートレター」として既に掲載されている内容を発展させ、「論文」として投稿することも可能です。ただし、単に分量を増やして詳細に説明しただけでは発展させたことになりませんので、ご注意ください。なお、特集号編集委員会では、本特集号のテーマの特性から、学力向上を目指した ICT 活用の実践を事例研究として「資料」としてまとめ、積極的に投稿していただくことを期待しています。

### 3. 論文投稿締切日

2008年1月28日（月）（2008年11月発行予定）

### 4. 論文送付先及び問い合わせ先

原稿は、この「原稿執筆の手引」(<http://www.jset.gr.jp/thesis/>)に従って執筆し、編集委員会事務局へ送付してください。会員専用 Web サイトから電子投稿することもできます。

### 5. 特集号担当編集委員会

委員長：堀田龍也(メディア教育開発センター) 副委員長：木原俊行(大阪教育大学)

幹事：寺嶋浩介(長崎大学)・高橋 純(富山大学)

委員：大島 純(静岡大学)・小柳和喜雄(奈良教育大学)・後藤康志(新潟医療福祉大学)・澤本和子(日本女子大学)・新地辰朗(宮崎大学)・鈴木克明(熊本大学)・中川一史(メディア教育開発センター)・中山 実(東京工業大学)・南部昌敏(上越教育大学)・野中陽一(和歌山大学)・東原義訓(信州大学)・益子典文(岐阜大学)・宮田 仁(滋賀大学)・吉崎静夫(日本女子大学)

# ショートレター増刊号論文募集のお知らせ（第二報）

日本教育工学会論文誌 Vol. 32, Suppl. の発行

論文受付締切：平成 20 年 4 月 1 日(火) 編集委員会事務局必着

日本教育工学会論文誌 Vol. 32, Suppl. は、年 1 回発行されるショートレターの増刊号です。投稿規定および原稿執筆の手引きを参照の上、奮ってご投稿下さい。

ショートレターの採録条件は、Vol. 27 より以下のようになりましたのでご注意ください。

(詳細は、JET117 号参照)

1. ショートレターは、刷り上がり 4 ページ厳守。(4 ページを超えるものは採録しない)
2. ショートレターでは、筆頭著者(ファースト・オーサー)は本学会会員であることが条件です。あるいは、筆頭著者が投稿時に入会手続きおよび会費納入等を行うことが必要です。なお、各会員は本ショートレターを年 1 編に限り投稿できます。
3. 平成 20 年 12 月に発刊の予定です。

ショートレターの内容については、例えば、以下のような内容が考えられます。

- ・ 全国大会や研究会で発表した内容をまとめたもの
- ・ 教育実践をベースにした実践と知見をまとめたもの
- ・ 教育システム開発など
- ・ 教育工学研究としての速報的な内容
- ・ 卒業論文や修士論文等としてまとめた内容、など

なお、ショートレターで掲載された内容を、研究的に発展させまとめて、論文採録の条件を満たすと思われる内容は、学会論文誌に投稿することができます。

ページ数が限られていることから、タイトル、著者、内容については十分厳選の上、ご執筆下さい。特に、ショートレターの趣旨から、多人数の連名著者はさけてください。研究全体がプロジェクトチームによる共同研究であっても、実際にショートレターの限られた内容に直接携わり、執筆した研究者にしてくださいようお願い致します。

ショートレターの査読日程予定(平成 20 年度)：

- 4 月中 担当及び査読者の指名
- 5 月 編集委員会で査読進捗状況の確認
- 7 月 編集委員会で採録、返戻の第 1 回決定
- 9 月 編集委員会で採録、返戻の第 2 回決定
- 10 月 最終原稿の提出
- 11 月 著者校正
- 12 月 増刊号発行予定

投稿論文の送付先：

日本教育工学会 編集委員会 事務局  
〒141-0031 東京都品川区五反田 1-13-7  
マルキビル

電子投稿でも受け付けています。

<http://www.jset.gr.jp/>

キリトリ線

## 第23回 研究奨励賞候補者推薦用紙

候補者氏名	講演番号	推薦者

日本教育工学会

Tel/Fax: 03-5740-9505

E-mail: [office@jset.gr.jp](mailto:office@jset.gr.jp)

## 第12期第4回理事・評議員会（合同）議事録

日時：平成19年9月23日（日）12:30～13:40

場所：早稲田大学人間科学部 第一会議室

出席：(理事)赤堀侃司会長、野嶋栄一郎副会長、矢野米雄副会長、赤倉貴子、池田 満、伊藤紘二、植野真臣、大久保昇、小柳和喜雄、木原俊行、向後千春、澤本和子、三宮真智子、清水康敬、鈴木克明、中山 実、東原義訓、堀田龍也、前迫孝憲、美馬のゆり、宮田 仁、山内祐平

(評議員)石塚丈晴、稲垣 忠、浦野 弘、加藤 浩、久保田賢一、黒田 卓、下田昌嗣、永岡慶三、南部昌敏、野中陽一、長谷川元洋、村川雅弘、柳沢昌義、吉崎静夫

(監事)水越俊行、山西潤一

欠席：(理事)大谷 尚、永野和男、黒上晴夫、室田真男

(評議員)新井健一、園屋高志、村瀬康一郎、横山節雄、米澤宣義

議事に先立ち、下記の挨拶があった。

- ・野嶋大会実行委員長から挨拶があった。
- ・清水理事から、大会受け付けシステムの状況および参加状況が報告された。
- ・木原大会企画委員長から挨拶があった。

1. 第12期第3回理事会議事録を資料のとおり承認した。

2. 各種委員会報告について

(1)編集委員会

堀田理事から特集号論文募集について説明があった。

(2)研究会委員会

堀田担当理事から研究会委員会での検討結果について報告があった。

(3)企画委員会

美馬委員長から、冬の合宿(2008年2月22～23日)の開催企画が報告された。

また、教育工学における産学連携の在り方について議論する産学共同セミナーを2008年2月29日(金)に、シンポジウムを6月21日(土)に開催する予定であることが報告された。

(4)顕彰委員会

三宮理事から研究奨励賞の推薦依頼があった。

(5)国際交流

韓国教育工学会(KSET)が本大会に参加されることが報告された。

(6)広報委員会

赤倉委員長からニューズレター154号の編集進捗状況が報告された。

3. 投稿原稿に対する著作権の取扱い基本方針案について

大会論文、研究会資料の著作権の取り扱いについての経緯が報告され、継続審議とした。

4. その他

(1)評議員から学会運営に関して意見をいただいた。

(2)理事ほかの挨拶

・南部理事から来年度の大会開催について挨拶があった。

・赤堀会長から、初中等高等教育における教育改善について学会活動と連動した科研費申請について協力要請あった。

・水越監事、山西監事から、本大会および今後の学会運営について意見と要望があった。

(3)今後の理事会

第12期第5回理事会 2007年11月24日（土）14：40～16：20

第12期第6回理事会 2008年1月26日（土）14：40～16：20

以上

■正会員 14名

見舘 好隆  
(公立大学法人 首都大学東京)  
細井 俊克 (独)国立健康・栄養研究所  
武内 亜里  
曾和 具之 (神戸芸術工科大学)  
岡本 郁子  
中井 伸夫 (大阪物療専門学校)  
芳賀 高洋  
(都立あきる野学園養護学校)  
津村 修志 (大阪商業大学)  
舟木 てるみ (高千穂大学)  
星屋 泰二  
(日本原子力研究開発機構 関西光科学研究所)

工藤 節子 (東海大学)  
高千穂 安長 (玉川大学)  
安井 元規 (慶應義塾大学出版会)  
坂本 暁美 (畿央大学)

■学生会員 14名

益子 卓 (早稲田大学)  
岩田 弘志 (鳴門教育大学大学院)  
山本 歩 (兵庫教育大学大学院)  
塙 陸一郎 (早稲田大学大学院)  
高橋 雄介 (慶応義塾大学大学院)  
村脇 裕基 (埼玉大学大学院)  
中村 峻 (東京工科大学大学院)  
松村 智恵 (早稲田大学大学院)

木田 裕子 (佛教大学)  
羽根 昭裕 (東京工科大学大学院)  
番本 充俊 (鳴門教育大学大学院)  
児玉 あゆみ (山口大学)  
伊勢 千尋 (鳴門教育大学大学院)  
天野 健太  
(北陸先端科学技術大学院大学)

■准会員 3名

張 栄 (西日本工業大学)  
大谷 和美  
中川 義隆

学会日誌

2007年

12月22日(土) 研究会「高等教育とeラーニング」(熊本大学)

2008年

2月22日(金)～23日(土) 冬の合宿研究会「授業評価・授業改善におけるテキストマイニングの有効性を探る！」(兵庫教育大学)

2月29日(金) 産学協同セミナー「教育学における産学協同プロジェクトの在り方」  
(内田洋行 東京ショールーム)

3月01日(土) 研究会「日本語教育と教育学」(名古屋大学)

5月17日(土) 研究会「テーマ未定」(岩手大学)

7月05日(土) 研究会「テーマ未定」(金沢大学)

9月06日(土) 研究会「テーマ未定」(玉川大学)

10月11日(土)～13日(月) 第24回全国大会(上越教育大学)

12月20日(土) 研究会「テーマ未定」(いわき明星大学)

お問い合わせ先 (Eメールアドレス)

- ◆ 論文投稿に関するお問い合わせ・・・編集委員会 (editor@jset.gr.jp)
- ◆ 研究会の開催についてのお問い合わせ・・・研究会事務局 (jset-branch@nime.ac.jp)
- ◆ 全国大会の開催についてのお問い合わせ・・・大会企画委員会 (taikai2007@jset.gr.jp)
- ◆ ニュースレター編集に関するお問い合わせ・・・広報委員会 (kouhou@jset.gr.jp)
- ◆ その他の掲載記事に関するお問い合わせ・・・学会事務局 (office@jset.gr.jp)

広報委員会

編集長:清水康敬, 広報委員長:赤倉貴子, 広報副委員長:宮田 仁,  
委員:矢野米雄, 伊藤剛和, 香山瑞恵, 神月紀輔, 三輪吉和 E-mail: kouhou@jset.gr.jp

日本教育工学会ニュースレター No.155

2007年12月12日 発行人 赤堀 侃司

発行所 日本教育工学会事務局

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-13-7 マルキビル

TEL / FAX: 03-5740-9505 E-mail: office@jset.gr.jp

http://www.jset.gr.jp/

郵便振替 00180-2-539055